

乳幼児期に子どもの共感力を育てるともあそび

提言

未来を担う子どもたちのウェルビーイングと日本社会の活性化のため、子どもも大人もみんなが遊びと遊び心を通して共に育つ「ともあそび」に参加できる社会環境をつくりだそう。

登壇者

- 【進行役】 藤原 佳典氏 (地独) 東京都健康長寿医療センター研究所 社会参加と地域保健研究チーム研究部長
- 【アドバイザー】 内田 伸子氏 IPU・環太平洋大学教授、お茶の水女子大学名誉教授
- 杉 啓以子氏 (社福) 江東園TQM経営企画部本部長
- 田中 千晶氏 東京家政学院大学人間栄養学部教授
- 西野 博之氏 (認定特非) フリースペースたまりば理事長

■ 寄せられた声から

- 子どもが健全に育つためにも、高齢者のいきがい、喜びになるためにも、「ともあそび」=自然に子どもと高齢者がいる場があるといいなあと思いました。保育園、学校、老人の施設から飛び出し、交流ができるようになっていける地域になれるようにしていきたいと思いました。
- 子どもにとってあそびは生きること。子どもに対して強制的ではいけない。共有的であるべき。考える余地を与え、楽しく遊ぶ。

議事要旨 藤原 佳典氏

次世代を担う子どもたちの「共感力」を育てるプログラムは重要である。そこで、子どもたちの共感力を育むべく、さわやか福祉財団は、乳幼児の頃から、地域のシニアたちとの「ともあそび」を広めることが重要との考えから、その普及策を検討するプロジェクトを推進してきた。

今回の東京サミットでは、同プロジェクトの検討会委員の4人の演者を迎えて議論をさらに深めた。

アドバイザーとして内田伸子氏（お茶の水女子大学名誉教授）には、発達心理学の観点から共感力の神経学的基盤をもとに子どもの共感力を育てる必要性について、また、どのように共感力を育てていけばよいのかについて解説いただいた。その中で、強制型ではなく共有型のしつけの重要性が強調された。乳幼児期は、生活すべてが「あそび」であり、「あそび」を通して心身が発育発達する時期である。

そこで、田中千晶氏（東京家政学院大学教授）には、「ともあそび」の多様な手法を紹介いただいた。特に、身体活動を増進し、座位行動を中断する「あそび」は子どもの発育と高齢者のフレイル予防の両面に有効である。例えば、日常の身近な「あそび」の中でも、子どもがローテーションして移動するなどのちょっとした工夫により、楽しく持続的な身体活動と座位行動の中断につながるといった事例を紹介いただいた。

次に、多世代に開かれた地域の遊び場・川崎市子ども夢パークを運営する西野博之氏（認定NPO法人フリースペースたまりば理事長）には、アウトドアでの「とも

あそび」を報告いただいた。ここでは、自由に、創造的に、失敗も明るく共感できるような体験を重ねる活動の現状と成果について報告いただいた。

最後に、杉啓以子氏（社会福祉法人江東園 TQM経営企画部本部長）には、保育園、デイサービスや障がい者施設などの共生型施設として取り組む活動を通して、日常生活の中で子どもたちの共感力を育む活動について解説いただいた。

以上より、「ともあそび」が共感力の育成に有効なことを確認した。一方、「ともあそび」を具体的に進める上で、行政の縦割り制度や中間支援者の資金難など解決すべき課題が抽出された。

折しも、同サミットの開催に先立つ本年6月、国会においてこども家庭庁設置法、こども基本法などが成立し、今後採用すべき子ども・子育て政策の内容を予算の裏付けのあり方も含めて検討する情勢となってきた。世界の先進諸国に比べて著しく立ち遅れている子ども・子育て政策を一挙に充実・加速させ、子どもを生み育てたい気持ちがあれば誰であっても安心して生み育てられる社会環境を日本で実現するまたとないチャンスを迎えている。こうした社会情勢と今回の議論を踏まえて、本分科会は分科会32と共同し、「子ども・子育て政策」策定についての提言と題して「日本を、安心して子どもを生み育てられる社会にしましょう。そして、地域のみんが参加して、どの子どももその子らしくすこやかに育てていきましょう。」を公表した。

アンケートの結果 参加者概数：48名 回答者数：27名

